

Morphology and Lexicon Forum (MLF) 2011

(国立国語研究所レキシコン共同研究プロジェクト 共催)

期日：2011年 9月24日(土), 25 日(日)

会場：大阪大学言語文化研究所 研究科棟 2階大会議室 (豊中キャンパス)

(会場案内：<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access>)

MLF ウェブサイト：<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/lingcommunic/mlf/>

問い合わせ先：竹沢幸一(筑波大学) takezawa.koichi.gn@u.tsukuba.ac.jp

9月24日(土) 受付：12:30～			
発表1	13:00-13:45	Wenchao Li (東北大学)	Event Argument in Adjectival Perception Complements in German -Comparison with English- (使用言語：英語)
発表2	13:50-14:35	工藤和也 (関西学院大学研究員)	日本語の与格交替
休憩(15分)	14:35-14:50		
発表3	14:50-15:35	中村渉 (東北大学)	名詞類の屈折パラダイムの類型論：最適性理論によるアプローチ
発表4	15:40-16:25	依田悠介 (大阪大学大学院)	語彙挿入の局所性と音韻的/形態統語論的語彙選択
休憩(15分)	16:25-16:40		
チュートリアル	16:40-18:10	西山國雄 (茨城大学)	分散形態論への誘い
移動時間	18:10-18:30		
懇親会	18:30～	場所：キャンパス内生協食堂の予定	

9月25日(日)				
発表5 (国語研プロジェクト連携)	10:00-10:45	田川拓海 (千葉大学/他 非常勤講師)	動詞から派生される連用形名詞の存在について：分散形態論を用いた分析	
発表6 (国語研プロジェクト連携)	10:50-11:35	鄭聖汝 (大阪大学)	ナル型言語と他動性 一実験調査による日本語・韓国語・マラーティー語の相違を通して一	
発表7 (国語研プロジェクト連携)	11:40-12:25	秋田喜美 (東京大学/日本学術振興会)・臼杵岳 (福岡大学)	僕らが銀座をぶらぶらとしない理由 一オノマトペ述語の意味特性と「と」の分布再考一	
昼休み(75分)	12:25-13:40			
シン日国 エ共本語 ク同語研 ト研究レ 発表キシ 表プシ ロコ	1	13:40-14:00	影山太郎(国立国語研究所)	プロジェクトの展望
	2	14:00-14:40	小林英樹(群馬大学)	漢語サ変動詞の主要部について
	3	14:40-15:20	竹沢幸一(筑波大学)	「見える」類動詞の非時制補文節におけるテ形述語と述語分類
	休憩	15:20-15:30		
	4	15:30-16:10	青木博史 (九州大学)	「クル型複合動詞の史的展開」

- * 24日の発表終了後、懇親会を予定しています。会費は一般5,000円、学生2,000円です。参加を希望される方は、件名に「MLF 懇親会」と記入の上、氏名、所属、一般・学生の別を書いてメールで国立国語研究所・神崎享子さん<kanzaki@ninjal.ac.jp>まで9月9日までにご連絡下さい。また、東日本大震災の被災地から参加を希望される若手研究者支援の一環として、当日会場で募金を行い、懇親会費の補助を行う予定にしております。募金に対する皆さまのご協力をお願いするとともに、院生も含め被災地域から多数の方が参加されることを期待しております。
- * 25日の昼食は各自ご用意下さい。会場近辺に食事をするとところはございませんのでご注意下さい。
- * 未定の部分は追って追加します。MLF または国語研のホームページをご覧ください。

Event Argument in Adjectival Perception Complements in German -Comparison with English-

Keywords: direct perception, adjectival perception complement, German

Wenchao Li Tohoku University

In German direct perception expressions, two issues in particular deserve discussion. First, not all adjectival perception complements are licensed in direct perception complements, as exemplified by (1).

(1) a. Mary sah ihn nackt.

Lit: ‘Mary saw him naked’.

b. ?Mary sah ihn betrunken.

Lit: ‘Mary saw him drunk’.

c. *Mary sah ihn müde.

Lit: ‘Mary saw him tired’.

The different acceptability of adjectival perception complements above suggests that adjectival predicates (APs) in direct perception complements in German exhibit a scalar structure. It seems that only closed-scale adjectival predicates are licensed in direct perception expressions.

Moreover, careful attention should be paid to the ungrammaticality of (1c), which could be improved by the addition of the perfect tense, a locative modifier, or an adverb, as shown in (2).

(2) a. ?Mary hat ihn müde gesehen.

b. ?Mary sah ihn müde auf der straße.

c. Mary hat ihn nie müde gesehen.

This paper discusses the distribution of APs in German direct perception complements, and aims to answer the question of why perception complements with non-closed scale adjectives can be improved with perfect tense, or by the addition of a postposition phrase (PP) or an adverb.

Unlike in English, where the perception verb *see* denotes a direct perception report, German *sehen* lacks such a function. Recall the example **Mary sah ihn müde*, where it

contributes to a potential indirect perception, describing the observer's conceptualisation of the perceived event, offering an 'evaluation' or 'interpretation'. This may account for the improved acceptability of adjectival perception verb complements in the perfect tense, with a locative modifier and an adverb, c.f. (2).

Moreover, Higginbotham's (1983:117) demonstration that English perception verb complements are *active* or *transient*, inspired Kerstin (2010) to argue that the English perception verb complement '*him tired*' is not only a bare AP but also consists of two sub-events, i.e. a functional projection which licenses an external event, and a result projection which contributes to the state. Given this, a crucial distinction between English and German perceptual expressions can be described as follows. Perception verb complements in German do not represent a result state because the AP-complement is encoded into the perceptual verb root, and thus has to be interpreted as a whole predicate, denoting evaluative or metaphorical interpretation. By contrast, in English, perception verb complements are composed of two sub-events, namely, an achievement predication and a state predication.

Furthermore, it has been observed that APs in direct perception complements in German exhibit a scalar structure. Following Kennedy and McNally (2005)'s proposal that there are four types of scale structure of adjectives, (i.e. (a) totally open scale; (b) lower closed scale; (c) upper closed scale; (d) totally closed scale), the distribution of APs in direct perception complements in German can be understood as: totally closed scale AP >? upper closed scale AP > ?/* lower closed scale AP > * totally open-scale.

References

- Higginbotham, James. 1983. The logic of perceptual reports: An extensional alternative to situation semantics. *The journal of Philosophy* 80.2, 100-127.
- Kennedy, Christopher and McNally, Louise. 2005. Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81.2, 345-381.

タイトル：日本語の与格交替

工藤和也（関西学院大学研究員）

キーワード：日本語、与格交替、3項動詞、所有変化、使役移動

問題の所在：与格交替は、これまで英語を中心として格や移動の観点から議論されてきた現象であり、3項動詞が一様に「が-に-を」の格パターンを持ち、「かき混ぜ」によって比較的自由に語順が変化する日本語では、その存在自体議論されることが少なかった。本発表は、日本語にも英語の与格交替に相当する現象が存在することを示し、その成立条件を語彙意味論的に明らかにする。

議論の流れ：まず Kishimoto (2001)を参考に、日本語の3項動詞を、着点句の有生性と後置詞「へ」・「まで」との共起可能性によって、(1)の4種類に分類する。前者は動詞が「所有変化」の意味を持っているか否か、後者は動詞が「使役移動」の意味を持っているか否かをそれぞれ独立にテストする方法である。

- (1) a. 所有変化動詞 [+所有変化、-使役移動]：あげる、売る、貸す、預ける
 b. 位置変化動詞 [-所有変化、-使役移動]：置く、載せる、積む、塗る、貼る
 c. 使役移動動詞 [-所有変化、+使役移動]：運ぶ、注ぐ、戻す、捨てる、撒く
 d. 使役移動所有変化動詞 [+所有変化、-使役移動] or [-所有変化、+使役移動]：送る、届ける、渡す、配る、返す

次に、日本語の3項動詞文の統語構造について、以下の2種類が存在することを示す。

- (2) a. [_{VP} DP-ga [_{V'} [_{VP} DP-ni [_{V'} DP-o V]]] v]]
 b. [_{VP} DP-ga [_{V'} [_{VP} DP-o [_{V'} [_{PP} DP [P ni]] V]]] v]]

例えば、目的語の語順に関して、(1a)の動詞は(2a)の着点>主題の階層関係を、(1c)の動詞は(2b)の主題>着点の階層関係を持つことが、以下の代名詞の束縛変項解釈の可否から分かる(Hoji 1985, Takano 2008)。((1b)は(1c)と同じ構造的特徴を示す。)

- (3) a. *ジョンが[[e_i それ_jを欲しがった]友達]_iに[3着以上の服]_jをあげた。
 b. ジョンが[[そいつ_iが e_j 欲しがった]服]_jを[3人以上の友達]_iにあげた。
 (4) a. *ジョンが[[そこ_iで e_j 見つけた]本]_jを[3か所以上の棚]_iに戻した。
 b. ジョンが[[e_i それ_jを見つけた]棚]_iに[3冊以上の本]_jに戻した。

さらに、与格句の統語的資格についても、(1a)の動詞は与格受身が可能なのに対し、(1c)の動詞は不可能であることから、(1a)の与格句は名詞句(DP)、(1c)の与格句は後置詞句(PP)であることが示唆される(Kishimoto 2001)。

- (5) a. メアリーが本を与えられた。 b. *メアリーのグラスがワインを注がれた。

これらの議論からの論理的な予測は、(1d)の動詞が文脈（すなわち、着点句の性質）によって、(2a)と(2b)のどちらかの統語構造を持つことであり、この予測は経験的に支持される。すなわち、(1d)の動詞は着点句が有生物の場合、(1a)の動詞と同様に振る舞い、着点句が無生物の場合、(1c)の動詞と同様に振る舞う。

(6) a. *ジョンが[[e_i それ_jを注文した]客]_iに[3組以上の布団]_jを届けた。

b. ジョンが[[そいつ_iが e_j 注文した]布団]_jを[3人以上の客]_iに届けた。

(7) a. *ジョンが[[そこ_iに e_j 必要な]布団]_jを[3軒以上の家]_iに届けた。

b. ジョンが[[e_i それ_jが必要な]家]_iに[3組以上の布団]_jを届けた。

(8) a. メアリーが手紙を渡された。

b. *その柱が電線を渡された。

これは(1d)の動詞が、「所有変化」と「使役移動」の2つの意味を語彙化しているからであり、英語の与格交替が所有と移動の2つの概念から引き起こされることと同等である。また、(1d)の動詞が(2a)の構造を取る時、着点句が有生物に限られることも、英語の二重目的語構文における有生性制約(**John sent London the letter.*)と並行的である。したがって、当該現象を与格交替と見做すことは理論的にも経験的にも妥当である。

結論: 日本語の3項動詞は4つの意味クラスに分類でき、それぞれが一般的な連結規則によって2つの相補分布的な統語構造に写像される。どの動詞がどの統語構造を取るかは、動詞の意味（例えば、LCS）から予測可能であり、言語の意味と統語の対応関係が単一的であると仮定すると、(1d)に挙げた3項動詞でいわゆる与格交替が見られることが帰結する。特に、目的語の階層関係と与格句の統語的資格の2点において、日本語の与格交替は、英語のそれと全く同一の特性を示す。

研究の理論的意義: 与格交替は、英語やギリシア語といった異なる語派についてこれまで観察されてきた現象であり、これが日本語にも存在するという事実は、言語の（特に、意味と統語の対応関係における）普遍性を示す証拠となるだけでなく、言語間の構文的差異は、統語構造を司る生得的な言語能力に拠るのではなく、経験によって習得される意味構造の違いから生じるという言語学的に重要な仮説を支持するものとなる。

参考文献: Hoji, H. 1985. *Logical Form Constraints and Configurational Structure in Japanese*. Ph.D. diss., U. of Washington. / Kishimoto, H. 2001. The Role of Lexical Meanings in Argument Encoding. *Gengo Kenkyu* 120, 35-65. / Takano, Y. 2008. Ditransitive Constructions. In S. Miyagawa and M. Saito (eds.), *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 423-455. Oxford: Oxford University Press.

名詞類の屈折パラダイムの類型論：最適性理論によるアプローチ

中村 渉（東北大学）

キーワード：形態論，最適性理論，パラダイム，融合，有標性

本発表の目的はゲルマン諸語の名詞類のパラダイムの多様性を記述する理論的枠組を提案することである。具体的には，分散形態論 (Halle and Marantz 1993) に倣い，名詞類の格・数・ジェンダーの素性複合と形態音韻的形式間の写像を，①統語的素性複合から形態的素性複合への写像，②形態的素性複合を音韻的に実現する語彙挿入，に分けるが，①を言語特定の規則（例：還元ルール，言及ルール）ではなく，格・数・ジェンダーの有標性階層から導かれる，一般性のより高い有標性制約・忠実性制約及び左記制約の局所結合から生じる複合制約から導くこと，パラダイム間の相違を上記制約群の異なるランキング及び語彙項目の相違から導くことを提案する。具体例は，以下の表1が示す古フリジア語及びイディッシュ語の限定詞（‘the, that’）である (Jacobs 2005; Bremmer 2009)。

まず，(1a)-(1c)の有標性階層から(2a)-(2c)の有標性制約を導く (cf. de Lacy 2006)。(3a,b)は(2a)-(2c)と対立する忠実性制約である。次に，有標性制約(2a)-(2c)の局所結合から(4a)のような複合制約を，マクロロール階層 (Actor < Und[ergoer]; cf. Van Valin and LaPolla 1997) と数階層／ジェンダー階層の調和的制約配列と制約(2a3) ((4b)では‘*{G, A, D}’と略記する)の局所結合から(4b)のような複合制約を導く。

- | | | | | |
|-----|----|--|----------------------------|---------------------------------|
| (1) | a. | 格階層 (Silverstein 1993) : Nom < Dar < Acc(/Erg) < Gen | | |
| | b. | 数階層 : Sing < Pl (< Dual) | | |
| | c. | ジェンダー階層 : Masc < Fem < Neut | | |
| (2) | a. | 1. *{Gen} | 2. *{Gen, Acc} | 3. *{Gen, Acc, Dat} |
| | b. | *{Pl} | c. | 1. *{Neut} 2. *{Neut, Fem} |
| (3) | a. | 1. IDENT [Case] | 2. IDENT [Number] | 3. IDENT [Gender] |
| | b. | 1. MAX [Case] | 2. MAX [Number] | 3. MAX [Gender] |
| (4) | a. | 1. *{Gen} & *{Neut, Fem} | | 2. *{Gen, Acc, Dat} & *{Neut} |
| | | 3. *{Neut, Fem} & *{Pl} | | |
| | b. | 1. *{Und/Neut} & *{G, A, D} | 2. *{Und/Fem} & *{G, A, D} | |
| | | 3. *{Und/Masc} & *{G, A, D} | 4. *{Und/Pl} & *{G, A, D} | |

(4b)は他動詞文の目的語の格標識に関する制約群であるが，調和的制約配列から派生する内在的ランキングを持ち，(4b1)が最上位，(4b3)が最下位である。

表 1: 古フリジア語 *thī*, イディッシュ語 *der* の屈折パラダイム

	単数						複数	
	男性		女性		中性		男・女・中	
主格	<i>thī</i>	<i>der</i>	<i>thiu</i>	<i>di</i>	<i>thet</i>	<i>dos</i>	<i>thā</i>	<i>di</i>
対格	<i>thene</i>		<i>thā</i>					
与格	<i>thā(m)</i>	<i>dem</i>	<i>thēre</i>	<i>der</i>	<i>thā(m)</i>	<i>dem</i>	<i>thā(m)</i>	
属格	<i>thes</i>				<i>thes</i>	<i>dem</i>	<i>thēra</i>	

各セルの左側の古フリジア語のパラダイム内で無地の網かけで示した融合は統語的素性複合から形態的素性複合への写像を担う(5)の制約階層から導かれるが、右下がり斜線を施したセル間の融合及び単数男性・単数中性・複数の与格間の融合は語彙挿入で素性値の不完全指定を伴う非該当形式(6a,b)から導かれる。

- (5) 制約階層 : (3a2), (3b2), (3b3), (4a1), (4a2), (4a3), (4b1), (4b4) >> (3b1), (2b) >> (2a3), (3a3) >> (3a1), (2c1), (2c2) >> (2a1), (2a2)
- (6) a. *thā* [Ø, Ø, Ø] b. *thā(m)* [Dat, Ø, Ø]
 c. *di* [Ø, Ø, Ø]

他方、古フリジア語の限定詞と比べると融合が一層進んだイディッシュ語の限定詞 *der* のパラダイムは、制約階層(5)の最上位層に属格標識及び対格標識の生起を禁止する有標性制約(2a2)を入れ、複合制約(4b2)を(4b1)を含む最上位層と忠実性制約(3b1)を含む層の間に挿入することに加えて、格・数・ジェンダーの全ての素性値を不完全指定した非該当形式(6c)を含む語彙項目から導かれる。

最後に、冠詞類が共起する名詞と協働で屈折パラダイムを構成するとの前提下に、ドイツ語の冠詞類のパラダイムも表 1 と同様に導けることを示す。

参考文献

- Bremmer, Rolf H., Jr. 2009. *An Introduction to Old Frisian*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- de Lacy, Paul. 2006. *Markedness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz. 1993. "Distributed Morphology and the pieces of inflection." In Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, (eds.), *The View from Building 20*, pp.111-176. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jacobs, Neil G. 2005. *Yiddish*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silverstein, Michael. 1993. "Of nominatives and datives." In Robert D. Van Valin, Jr. (ed.), *Advances in Role and Reference Grammar*, pp.465-498. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Van Valin, Robert D. Jr. and Randy J. LaPolla 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.

語彙挿入の局所性と音韻的/形態統語論的語彙選択

依田 悠介

概要:本発表では、動詞活用の音便形出現規則に対し、以下の二点を提案する。(i)それぞれの活用形の語彙(Vocabulary)は、音韻的な環境のみならず、統語的な情報をも参照し決定している。(ii)語彙の挿入に関する情報は、局所性 (Embick 2010)に従う。

主張:現代日本語の音便はRootとHeadの局所的な関係により誘発される異音 (Grammatical conditioned allomorphy)に加え、音韻論の情報を参照した異音 (Phonological conditioned allomorphy)からの要請により誘発される場合がある。前者に関しては、統語的な情報、特に $\sqrt{\text{Root}}$ と機能範疇の相関関係が問題となり、更に、異音のタイプは音韻論的な情報により決定される。

音便:テ形の音便は、これまで音韻論の分野において特に注目を集めてきた。しかしながら、田川 (2009)が指摘するように、テ形の音便規則は純粹に音韻論的な要請により生じているとは考え難く、テ形の音便は動詞句と /te/ という音が隣接している為生じている訳ではない(1)。また、同様の音便形式は、テ形のみならず、「タリ/ダリ」などでも観察される事から、当該音便現象は、テ形の持つ形態統語論的な素性である [=conj] を持つ & の主要部と、 $\sqrt{\text{Root}}$ の関係性から形態統語論的局所性に従い生じていると主張する。言い換えれば、本稿では、/te/ が所謂 [+conj] の形態統語論的指定を受けた場合においてのみ、 $\sqrt{}$ は音便化の適用を受けると主張する。これを模式的に表すと、以下のように、[+conj] の指定をもつ /t/ および /d/ の音韻的特徴を持つ主要部との併合により、形態統語論的には、音便化の環境が決定され、音韻部門において $x \rightarrow y$ への音韻的変化つまり音便が生じる(2)と説明される。

テ/デ交替の生じる環境:内丸 (2006)の議論に従うと、テ形節のテは&の主要部の具現化であるという。本稿では、内丸の主張を採用し、更に以下を主張する事により、内丸のデータを補強する。第一に、テ形節は通例、TPより上位の範疇を要求すると言われる *wh-operator* が節内に出現する事を許容する(3)。また、もし、三上(1953)あるいは、三原の一連の論考が主張するように、「テ」が時制の具現化であるとするのであれば、統語論におけるファンクションとして、二つの文を結ぶ働きを持つ範疇が存在しない事となる。この二つの点をふまえ、本稿では内丸の主張を踏襲し、[&P [CP [TP [VP...] T⁰[±tense]] C⁰[anchoring]]&⁰[-te]] という構造を仮定し&の主要部がTの主要部と隣接した場合に、音韻部門でTの刈り取りが生じると仮定する。

局所性:ここでは、過去の時制辞タ/ダの交替と音便を例に局所性を観察する。 $\sqrt{\text{Root}}$ 自体が異音を生じる環境としては、以下の(4)にあげられる環境が想定される cf. 佐佐木2005)。さらに、本稿では、Embickの主張する局所性に従い、形態統語論的な局所性を仮定する。具体的には、 $\sqrt{\text{Root}}$ とTの主要部はお互いに局所

的に参照できると仮定する。その帰結として、Tの主要部に出現すると考えられる/ta/および/da/は $\sqrt{\text{Root}}$ から可視的であると同時に、Tの主要部からも $\sqrt{\text{Root}}$ は可視的であると考えられる。つまり、機能範疇に挿入される主要部の音韻現象は、 $\sqrt{\text{Root}}$ の音韻的特徴を参照(5)し、同時に機能範疇の音形を参照し、 $\sqrt{\text{Root}}$ の音形も機能範疇に挿入される語彙を同時に参照する(6)。

データ

(1) a. [vkog] + [& te] → koi-de/*kogi-te b. [vkog]+[N te] → *koi-de/ kogi-te
 “row” +& “row and...” “row”+ person “rower”

(2) x → y / _____ [t/d...[+conj]]

(3) a. 誰がそう言って、誰が泣いたの?

b. [&P[CP Op[誰がそう言t]-te], [CP Op [TP誰が泣いた]]-の.]

(4) a. t → : t / V# _____ [+conj] (Germination) b. r → t / V# _____ [+conj]

c. {b,m} → n / V# _____ [+conj] (nasal) d. {k,g} → i / V# _____ [+conj]

(5) a. & ↔ de / C={m,n,d,g}V# _____ b. & ↔ te (elsewhere)

(6) [&P [CP [TP [VP [√P√Kag-] ∅]T⁰]C⁰]]&⁰

↑ _____ ↑

(i) VI: kag[^]te / kag → kai / -te → -de

(ii) phonology: kai-de

主要参考文献

Embick, David. 2010. Dimmenstion of interface visibility. -ms. University of Pennsylvania.

田川 拓海. 2009. 『分散形態論による活用と語形成の研究.』未刊行博士論文

動詞から派生される連用形名詞の存在について ：分散形態論を用いた分析

田川 拓海（千葉大学/他非常勤講師）

キーワード：連用形名詞、分散形態論、動詞(化)要素、自他交替

1. 目的と主張

動詞連用形の形態をとる名詞（「泳ぎ」など。以下「連用形名詞」とする）に対して分散形態論(Distributed Morphology)を用いた統語的分析を提案する。

具体的には、同じく分散形態論を用いた研究であり、連用形名詞は動詞からの派生ではなく範疇未指定の要素 $\sqrt{\text{root}}$ が直接名詞化したものであるとする Volpe(2005)の議論には 1) 自体交替に関わる形態、2) 形容詞派生動詞、3) 受動/使役形態素、の三点で問題が生じることを指摘し、連用形名詞には $\sqrt{\text{v}}$ が一度動詞化されそれがさらに名詞化されたものが存在することを主張する。

2. 自他交替に関わる形態

Volpe(2005)が主張するように連用形名詞は $\sqrt{\text{v}}$ が一度も動詞化を経ずに直接名詞化されたものだとすると、(1)の下線部のような自他交替に関わる形態（以下「自他の形態」とする）をどう考えるのかということが問題になる。

(1) a. naga-re : naga-s （流れる：流す）

b. tom-ar : tom-e （止まる：止める）

なぜなら、語形成に対する統語的分析を取る場合、自他の形態は機能範疇 v の具現したものであると考えるのが有力な選択肢の一つだからである（長谷川(1999)、西山(2000)など）。それらの分析に従うと、少なくとも自他の形態を持つ動詞の連用形名詞は動詞性を担う v をその内に含むことになり、Volpe(2005)の主張とは相容れない。Volpe(2005)はこの問題に対して、(2)に示すような自動詞他動詞両方に現れる形態（-e-）があることから、自他の形態は動詞の自他と直接結びつく要素（ v ）ではないと主張している。

(2) a. ak : ak-e （開く：開ける）

b. ni-e : ni （煮える：煮る）

しかし、この議論は部分的なものであり自他の形態全てに敷衍できるものではない。さらに、Volpe(2005)の $\sqrt{\text{v}}$ からの直接派生分析の重要な証拠の一つである動詞と連用形名詞の意味のずれについて、最近の分散形態論の研究ではその

証拠としての強さが疑問視されているという議論 (Harley(2010)) を紹介する。

3. 形容詞派生動詞を含む連用形名詞

形容詞派生動詞 (deadjectival verb) が Volpe(2005) への直接の反例となる。

(3) a. *nemu-i* : *nemu-r* (眠い : 眠る) → *nemuri* (眠り)

b. *ita-i* : *ita-m* (痛い : 痛み) → *itami* (痛み)

(3)に見られるように、形容詞との形態的対応を考えると /r/, /m/ の形態 (下線部) は動詞化要素である。従って、これらの動詞からの連用形名詞は一度動詞化を経て派生されていることになり、Volpe(2005) の主張の反例となる。

4. 受動/使役形態素、統語的複合動詞を含む連用形名詞

さらに、連用形名詞には受動/使役形態素を含む例も存在する。

(4) a. 引き込まれにご注意ください。(つくばエクスプレス車内)

b. お気に入られ (ネット用語)、泳がせ (釣り用語)、…

受動/使役形態素をどのように分析するとしても、動詞要素の存在を省いて考えることはできない。従ってこれらの例も、Volpe(2005) の分析に反して、連用形名詞には動詞要素を含む例が存在することを示している。

5. まとめ

以上の議論から、連用形名詞には次のような構造を持つものが存在すると主張する。

(5) [N [V √(root) V[+V]] N[+N]]

本発表の議論は分散形態論を基盤にしたものではあるが、一方で 1) 連用形名詞は動詞からの派生である、2) 連用形名詞には統語的な要素 (受動/使役) を含むものがあり統語的な分析を考える必要がある、ということを明確にする点で連用形名詞の分析一般への貢献にもつながると考えられる。

【引用文献】

Harley, Heidi(2010) “Roots, selection & domain for idiomatic meaning,” talk at The End of Argument Structure Workshop, University of Toronto.

長谷川信子(1999) 『生成日本語学入門』 大修館書店.

西山國雄(2000) 「自他交替と形態論」 丸田忠雄・須賀一好(編) 『日英語の自他
の交替』 pp.145-165 ひつじ書房.

Volpe, Mark(2005) *Japanese Morphology and its Theoretical Consequences: Derivational Morphology in Distributed Morphology*. Ph.D. dissertation, Stony Brook University.

ナル型言語と他動性
——実験調査による日本語・韓国語・マラーティー語の相違を通して——

鄭 聖汝
大阪大学

キーワード： スル型言語、ナル型言語、他動性、意図性、視点、実験調査、日本語、韓国語、マラーティー語

1. 研究の背景

他動性のプロトタイプ理論によれば、他動性は言語の普遍的な特徴であり、どの言語でも意図性が高いものは他動詞文と、低いものは自動詞文と相関関係を結ぶとされる (Hopper & Thompson 1980 他)。一方、主として日英語対照研究から導かれた類型論的仮説によれば、他動性の現れは言語によって異なり、スル型の表現 (他動詞文) を好む言語 (例えば、英語) と、ナル型の表現 (自動詞文) を好む言語 (例えば、日本語) があるとされる (池上 1981 他)。影山 (1996) によると、その背後には言語による発想法の相違があり、それは当該事態を眺める際の視点の問題、即ち「結果重視」の視点をとるか「動き重視」の視点をとるかの違いに還元できる。ということから、類型論的仮説は一応検証可能なものになっているといえる。

2. 目的

本発表では、影山 (1996) が提案した二つの視点——結果重視の視点 (スル型) と動き重視の視点 (ナル型) ——を援用し、日本語・韓国語・マラーティー語を取り上げ、パイロット的な実験調査を行った結果を報告する。目的は、(1) 言語データから理論的に得られた類型論的仮説が、3 言語における実際の言語使用の場面ではどのように現れるかを実証的に検証することと、(2) 他動性のプロトタイプ理論と上記の類型論的仮説の間には一種の矛盾関係が含まれていることを、実験結果を通して実質的に示すことである。

3. 実験説明と結果分析

実験はビデオ映像による非言語的な実験刺激を用いた。場面はある人が手でコップの転倒し、液体の流出を引き起こす場面 (意図的・非意図的) を提示した。また上記の二つの視点も導入し、結果重視か動き重視かを計ることができるよう、加工した映像 (非連続再生) も用意した。具体的には、使役連鎖 (causal

chain) の中間段階 (コップの転倒) を伏せて休止を挟んだ映像——即ち、①原因事象 (ACT ON) ⇒②ブランク (BECOME) ⇒③結果状態 (STATE) ——を提示し、③に①を取り付けて述べるのか (他動詞コード化)、①を取り外して③のみ言及するのか (自動詞コード化) を調査した。つまり、「意図的 VS. 非意図的」条件 (他動性条件) と「連続再生 VS. 非連続再生」条件 (視点条件) の4条件を提示し、同じ刺激に対する3言語のそれぞれの反応を調査した。連続再生とは、中間段階をブランクに処理せず、ノーマル映像のまま作成したものをいう。被実験者は日本語 108 名、韓国語 107 名、マラーティー語 135 名である。

ここで、まず理論的な予測を確認しよう。他動性のプロトタイプ理論によれば、意図的条件では他動詞選択が予測される。一方、類型論的仮説によれば、もし当該言語がナル型であれば、意図的な条件でも自動詞選択が予測される。

実験の結果は以下の通りである。表 1 と表 2 は、3言語の自動詞・他動詞使用割合(%)を出したものである。それぞれ意図的・連続再生と意図的・非連続再生の結果である。(紙幅の都合上、非意図的条件については省略)

<表 1> 意図的・連続再生

	自動詞	他動詞	なし	合計
日	52.7	34.5	12.7	100%
韓	35.2	42.6	22.2	100%
マ	35.7	41.4	22.9	100%

<表 2> 意図的・非連続再生

	自動詞	他動詞	なし	合計
日	85.2	3.7	11.1	100%
韓	76.0	16.0	8.0	100%
マ	33.3	56.7	10.0	100%

表 2 の非連続再生は、表 1 と比較してみると明らかであるが、意図的条件であるにもかかわらず、日本語と韓国語では大多数の被実験者が自動詞を選択している。一方、マラーティー語は日韓両言語と異なり、他動詞選択が多い。表 1 と比べると、むしろ他動詞選択が増加している。このことから、マラーティー語は他動性プロトタイプに合致した結果を見せるが、日本語と韓国語と類型論的仮説のナル型言語に合致した振る舞いを見せると考えられる。非意図的条件の実験結果でも、マラーティー語は他動性プロトタイプに合致した振る舞いを見せるが、日本語・韓国語では他動詞選択も見られる。

4. 結論

以上から、日本語と韓国語はナル型、他方のマラーティー語はスル型の傾向を見せることがわかる。また、他動性のプロトタイプ理論は、スル型言語の説明には適しているが、ナル型言語の説明には適していないことがわかる。ただし、これは一実験の結果から得られた結論であることを添えておく。

<参考文献>

池上嘉彦(1981), 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.

影山太郎(1996), 『動詞意味論：言語と認知の接点』 くろしお出版.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson(1980), Transitivity in Grammar and Discourse,
Language 56-2: 251-299.

僕らが銀座をぶらぶらとしない理由

—オノマトペ述語の意味特性と「と」の分布再考—

秋田喜美

臼杵 岳

日本学術振興会／東京大学

福岡大学

キーワード：オノマトペ述語、「と」、「する」、アスペクト、類像性

本論は、日本語の様態オノマトペが見せる次の4形式の適切な扱いを提案する。

- (1) a. 銀座をぶらぶら歩いた。 c. 銀座をぶらぶらした。 **本論**
 従来 b. 銀座をぶらぶらと歩いた。 d. ?銀座をぶらぶらとした。

先行研究では一般に、オノマトペと一般動詞が共起する(1a, b)が同義／バリエーションとして括られ、「する」を伴う(1c, d)のような所謂「オノマトペ動詞」から「品詞的」に区別されてきた(田守・スコウラップ 1999 参照)。この想定は、一般動詞と共起するオノマトペは様々であるのに対し、動詞化するオノマトペは擬音語が稀で擬情語が豊富である(例：*ぴよぴよする vs. わくわくする；即ち類像性の低いオノマトペが動詞化する；Akita 2009)、というような意味傾向を捉える分には妥当かもしれない。これに対し本論は、**i)** (1a, c)の共通性と **ii)** (1b, d)の「と」の性質の違いを、特にアスペクトと類像性という観点から論じる。引用辞・アスペクト・類像性は長くオノマトペの意味論における中心テーマであったにも関わらず、その間の関係に焦点が当てられることはなかった(Toratani 2007; Tsujimura & Deguchi 2007; Akita 2009)。

i. 「ぶらぶら歩く」と「ぶらぶらする」の共通性：複雑述語説

オノマトペ副詞の動詞修飾の例として(1b)と同一視されがちな(1a)「ぶらぶら歩く」は、実は(1c)「ぶらぶらする」と同様に複雑述語をなす。この考えは、「と」の付かない裸オノマトペは典型的な動詞と隣接して起こり易い、という Toratani (2006)の観察を発展させた Akita (2010)の提案に同調するものである。

複雑述語説で問題となりうるのが、裸オノマトペが「ぶらぶら銀座を歩く」のように動詞から離れて生起するという事実である。本論はこの例を「と」の省略と考える。その証拠として、複雑述語と考える(2a)はオノマトペ動詞(2b)同様 atelic であるのに対し、(2c)のような動詞から離れた裸オノマトペは、(2d, e)の「と」付きのオノマトペ同様 telicity 指定を持たない点が指摘できる。

- (2) a. 銀座を30分{間/*?で}[ぶらぶら歩いた]。(cf. Tsujimura & Deguchi 2007)
 b. 銀座を30分{間/*?で}[ぶらぶらした]。

- c. (?)ぶらぶら 30 分 {間/で} 銀座を歩いた。
 d. [ぶらぶらと]30 分 {間/で} 銀座を歩いた。(cf. Toratani 2007)
 e. 銀座を 30 分 {間/で} [ぶらぶらと]歩いた。

ii. 「ぶらぶらと歩く」と「?ぶらぶらとする」の相違性：ふたつの「と」

「と」はオノマトペ動詞内とそれ以外で異なる機能を持つと考えられる。Kageyama (2007)は、「[_{State} あっさり]と[_{Event} し]たスープ」のような属性叙述のオノマトペ動詞に現れる「と」を、事象タイプの異なるオノマトペと「する」の間を取り持つ BECOME 関数を具現化する要素とする。(2d)と異なり、この[オノマトペ+と]は「する」とある程度の語彙的緊密性を示す点で(例：あっさりと{*スープが/?少しは}した)、この「と」は形態論的要素と言える。

一方、一般動詞と共起するオノマトペでは、「と」の有無が統語特性と呼応する(オノマトペ+と=付加語；裸オノマトペ+動詞=述語)。この「統語的」な「と」には類像性保存という機能が見出せる。(3)のように、裸オノマトペは意味拡張により類像性が減じ易い一方で、[オノマトペ+と]はそれに抗う。

- (3) a. {豚/豚^{たく}}が[ぶーぶー言っ]ていた。(述語： 鳴き声/不平)
 b. {豚/*?豚}が[ぶーぶーと]言っていた。(付加語： 鳴き声/*?不平)

類像性と述語性の逆相関は、冒頭のオノマトペ動詞の意味傾向と一致する。擬声語は動詞を形成するには類像性が高すぎることから(*ぶーぶー(と)する)、高い類像性に適した形態統語環境として[オノマトペ+と] > [裸オノマトペ+動詞] > オノマトペ動詞という階層が立つ。尚、分布上、形態的「と」はないのが無標である(「付加」される)一方、統語的「と」はあるのが無標である(「削除」される)というそもそもの差は、2つの「と」の存在を支持する。

以上より、[裸オノマトペ+動詞]は複雑述語としてオノマトペ動詞(「と」が付こうと付くまいと)と共通性を持つが、[オノマトペ+と+一般動詞]とは意味的・統語的に異なる、という(1)の地図が得られることになる。

参照文献：Akita, K. 2009. *A grammar of sound-symbolic words in Japanese: Theoretical approaches to iconic and lexical properties of mimetics*. Ph.D. diss., Kobe U. ---. 2010. A constructional account of the morphological optionality of Japanese mimetics. ICCG-6, Charles U, Prague. Kageyama, T. 2007. Explorations in the conceptual semantics of mimetic verbs. In B. Frellesvig et al., eds., *Current issues in the history and structures of Japanese*, 27-82. Kurosio. 田守育啓・ローレンス=スコウラップ. 1999. 『オノマトペ：形態と意味』くろしお. Toratani, K. 2006. On the optionality of *to*-marking on reduplicated mimetics in Japanese. *JK* 14, 415-22. CSLI. ---. 2007. An RRG analysis of manner adverbial mimetics. *Language and Linguistics* 8: 311-42. Tsujimura, N. & M. Deguchi. 2007. Semantic integration of mimetics in Japanese. *CLS* 39, 339-53.